

序

～長寿大国日本に求められているものは何か～

「朝顔に つるべ取られて もらい水」

江戸中期の女流俳人、加賀の千代女の有名な俳句である。この句には、日本人の特性とも言える細やかな憐憫の情が、朝顔の花のはかなさに重ね合わされて詠い込まれている。「はかない」ものに対する愛憐の情は、日本の精神文化の重要な特徴であり、高度の近代化を果たした現在にあっても日本人の心の奥底に底流する感覚である。この独特の感覚は、西欧において古代ギリシャから脈々と受け継がれた分析的な精神文化とは、非常に異質のものであると言わねばなるまい。日本人は、井戸の横で朝顔がひっそりと花咲いているのを見て、その「はかなさ」を愛おしいと感じる。おそらく西欧の精神文化を基本とする人達は、「なぜこんなところに朝顔が咲いたのだろう」と訝るのが先に立つのではないだろうか。

この精神風土の違いは、おそらく日本と欧米において、科学者の事象を観察する際の視点、態度の違いとなって現れている。「老い」は「はかない」生を彩る事象の一部として、日本人の精神風土の中に自然と組み込まれている。だから、井戸の横に咲く朝顔が、「解決すべき疑問」として捉えられることがないように、「老い」は日本人にとっては、ごく当たり前の心象風景の一部になっているのではあるまいか。つまり、日本人にとっては、分析的精神を向ける対象とはなり得ないのかもしれない。

筆者ら二人は、ある日ランチを一緒に食べながら、そんな会話を交わしていた。そもその話の発端は、日本は世界に冠たる長寿大国であり、また科学技術立国として成長を遂げてきた歴史があるにもかかわらず、なぜこれほどまでに「老化・寿命の根源的メカニズム」の研究が振るわないのか、というところから始まったのであった。日本における研究体制、あるいは研究費配分の問題も当然議論に上ったが、それだけでは説明がつけられない、というのが筆者らの一致した意見であった。日本人研究者は非常にすぐれた分析的視点をもっているにもかかわらず、なぜ「老化・寿命」の問題においてそれが発揮されないのだろうか。もし「老化・寿命」の問題が、「解決すべき疑問」として捉えにくいのであれば、そもそもどこにどのような疑問があるのか、またあり得るのか、を知るための大局的な俯瞰をまず得ることが重要となってくるであろう。そうした目的を達成するための総説集を編纂したらよいのではないだろうか。

この時の筆者らの会話が、この増刊号の正に出発点となった。「老化・寿命」研究の大局的かつ最先端の俯瞰図を提供し、これから解決すべき問題がどこにあるのかを明らかにしていく、それがこの増刊号の目的である。この目的を達成するために、研究の第一線の現場で活躍されている国内外の研究者の方々に、多大な御協力を頂いた。この場

をお借りして、この増刊号に寄稿された全ての筆者の方々に心から御礼を申し上げます。
また、入稿までのタイトな予定の中で、大変な編集作業にあたって頂いた「実験医学」
編集部の方々にも深く御礼申し上げたい。

日本人には、失ってはならない貴重な精神文化がある。しかし、その反面で日本が長
寿大国として世界にその範を示していくのだとすれば、日本人が愛おしむ生の「はかな
さ」に、世界の人々が共通して理解しうる「形」を与えていく作業が必要となってくる
のではないだろうか。筆者らは「老化・寿命」研究を通して、日本人の心が世界へと広
がっていく日が来ることを願ってやまない。

2013年11月

今井 眞一郎
吉野 純